

まにわにが幻想入り

ミスターサー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある十二人の忍の頭領がいた。

彼等は故郷を救うため、伝説の刀を集める事にした。

が全員、半ば倒れ死んでしまった・・・これはその十二人が幻想入りしたお話

※にじふあんで書いていた時、刀語にハマッてしまった時、まにわにが好きすぎて幻想入りを書いてしまった作品です。

目次

神のまにわにが幻想入り	1
首狩りの蠅螂が幻想入り	3
長寿の海亀が幻想入り	7

神のまにわにが幻想入り

「ふむ、我は何故森に居るのだろうか？」

そう呟く奇妙な忍び服を着た男は顎を右手で撫でる。

奇妙というのは忍び服なのに派手さが有り、頭には鳳凰のような鶏冠（とさか）と嘴（くちばし）の被り物を着けているのだ。

「我は、そう人鳥（ペンギン）から四季崎季々の変体刀十二本の一本、毒刀（めつき）を川獺（かわうそ）の腕で受け取り、そして・・・死んだ。」

男は冷静に、静かに、自身に起こった事を淡々と語る。まさに自身の死に興味が無いような言い草でだ。

「・・・ふむ、まあ幽霊として化けたのかは分からぬが足は二本付いている、脈も有る、人としての温かさもある。仮として我は生きているのかもしれないが・・・理解できない所も有る。何故左腕は元の腕になっているのか・・・」

男は止まらず語り続けるが、それを止めて数歩歩く。

「とにかく、まずココを確認し。安全な場を手に入れなければ・・・」

そう言いながら男は歩きを止めると歩いてきた方向に身体を向け、視線を有る方向に

向け気配を殺しつつ忍の武具、クナイを懐から取り出し、逆手持ちに、構える。

「さて、先程から覗いているのは分かっている。素直に顔を現したらどうだ？」

「・・・あら、ばれてたの？」

どこからか女性の声が現れ、男の目の前に亀裂ができ、一人の女性の上半身が現れる。

「始め・・・ではないが、独り言を言っている時に奇妙な気配を感じ取っただけだ」

「あらそう、気配を消すのは得意分野なんだけど」

「それを読み取れたのは忍だからだと思う」

「そう、職業のせいね。まあいいわ」

女性は扇子を取り出し、自分を扇ぎながら「アナタの名前は？」と質問をする。

「その問いは、まずお主から言うものではないか？」

「あら、こういうのは男性がエスコートするものよ」

「あいにく、我はそのような志は無い。なので、そちらから言っていたらきたい」

「そう残念、私は八雲（やくも）紫（ゆかり）。アナタは？」

「我か？我は真庭（まにわ）鳳凰（ほうおう）、里の者から神の鳳凰と呼ばれる忍の頭領の一角だ」

男（鳳凰）は女性（紫）にそう答えを返した。

首狩りの蠍が幻想入り

・・・幻想郷。

美しく幻想、儂い幻想、脆い幻想、怖い幻想、そんな非日常が有る隠れた幻想達の都。その一角に一つの寺、守矢神社に一人の男が立っていた。

目は鋭く、忍び服で蠍が描かれている紋が腹に有り、蠍の顔みたいな被り物を被っていた

真庭忍軍十二頭領の一人、蟲組指揮官、真庭蠍（かまきり）で有る。

蠍は生前、いや生きている場合は生前とは言わないが、蠍は一度死んだ。

虚刀流当主の姉である鑢（やすり）七実（ななみ）によって、自身が使った忍法の凶器使われて死んだのだ。

（今も信じられんがまさか黄泉から蘇り、そして今。幻想郷と呼ばれる世界の空気を吸っているとは・・・）

あの人外（虚刀流の姉）に殺され、人外を越える猛者共の場に来るとは、な）

蠅螂はフンと軽く鼻で笑いながら山々の木々を見る。

実は蠅螂が木々を見つめている理由は、真庭の誰かがもしかすると幻想郷に入ってるかもしれないという希望が有ったのだ

「あ、蠅螂さん」

「ん？」

しかし蠅螂は木々を見つめるが、狼煙（のろし）は上がらず、下から声をかけられた。

「早苗殿、か。何か用か？」

「ですから、ご飯と言いましたよ」

「・・・そうか」

「あと鳥居の上に載らないでくださいよ」

「一番高い所が無いからな」

「だからといって登つちやダメです！」

と早苗は一喝し、プンスカと頭から煙を出しながら頬を膨らませて怒る。

「・・・分かった、悪かったな。」

蠅螂はヒョイッと鳥居から飛び降り、早苗の前に立つ。

「じゃあ、ご飯食べましょう！」

「・・・ああ」

蠅螂は早苗の後に続き、母屋に入った。

ちなみに早苗はただの女の子ではない。

緑の髪をし、奇跡を起こせる。現人神だ。

この二人の出会い話は、いづれしたいと思う。

おまけ

「早苗殿」

「あ、諏訪子様。口にお弁当（米粒）が・・・」

あ、なんですか？」

「聞きたいのだが幻想郷に海は無いのだろうか？何故、川魚ではなく海鮮の鯛が出ているのだ？」

「・・・奇跡を起こしました。諏訪子様の為に」

「甘いね、早苗」

「早苗だからねー」

「バカにされてるんだぞ」

「なにッ!？」

そんな夕食の出来事だった

そして何気（なにげ）に初登場の神。崇り神の諏訪子と軍神の神奈子だった。

実は出す気はなかったんですが今宵の幻想話はここで終わらせていただきます

次回予告

「あなたは一体?」

「ふん、お主に語る事など無い」

「まあ、良いです。斬れば分かります」

「それでは皆様、名乗ろうかのワシは真庭忍軍十二頭領の一人で魚組指揮官の――」

「いざ! 始め!」

長寿の海亀が幻想入り

皆様は、長寿と聞いて思い付く動物はなんでしよう？

鶴？

虫？

それとも亀ですか？

私、語り手が一番早く思い付くのは亀ですね。

さて、その長寿の通り名を持つ、一人の真庭忍軍頭領が居た。

真庭海亀、通り名は長寿の海亀である。

彼は忍法は使えない珍しい忍だったが剣術の才能が有る有望な忍だった。

しかし最期は『不忍』と書かれた仮面を被った忍に生きることと死ぬことも許されない残酷な殺され方をされた一介の忍でも有る。

「と、言うわけだ」

「あらあら、大変だったのね」

「大変どころではない、西行寺よ。」

あの不忍の忍は残忍かつ卑怯者なのだ」

「ふーん、でも生きてるわよね？あなた」

「それは・・・そうじゃが」

言葉を濁す海亀、そして読者は「お前が言うか」と言うと思うが、まあ投げておこう。

「しかし、何故ワシはココに居るのだろうか？」

「あら、ここは冥界だし良いんじゃないかしら」

「西行寺、お主。先程ワシは生きてると言わなかったか？」

「あら？そうだったわね。」

海亀は、「まったく噛み合わないのう」とぼやきつつ、枯れている桜の木を見た。

「のう、西行寺よ。あれは？」

「ん？あれはアナタが触れたら死ぬから近寄らない方が良いわよ」

「・・・そうか」

「ええ♪あ、お饅頭いかが？」

「いや、遠慮しとこう。もう腹に入らん」

「あら、残念。」

「と、いうよりワシは胸焼けしとる」

「なんで？」

「団子30、饅頭50を食っている様子を見れば胸焼けするわい」

「あら、そう」

「残念ね」と西行寺と呼ばれた女性は溜め息をつき、お茶を啜る。

「どこがだ」と海亀は、どーでも良いや、みたいな感じで言う。

「じゃあ次は、私が質問して良い〜?」

「おう、いいぞ。出来る限りな」

「じゃあ、アナタ何人殺したの?」

「・・・さあ? 何人殺したのだろうな、覚えてない」

「そう、なら・・・ウチの半人前の従者と戦ってもらえるかしら、否定権は」

パン!と大きく襖が開く音が海亀の背後から聞こえ、刀を抜刀する音を立てながら畳を駆けて、刺客が海亀に目がけて飛び掛り、襲い掛かる。

しかし海亀は細い剣の鞘で刺客の腹を突き、後ろに有った襖まで突き飛ばす。

「・・・やれやれ、面倒な」

「あら、良いでしょ。」

「殺る身になってほしいわ」

海亀はぼやくと腰を叩きながら立ち上がり、中庭に向かいつつ、刺客が飛んだ方向を見る。

そして中庭の真ん中に着いた瞬間、白髪でカチューシャを着けた刺客が現れた。

「お前は、いったい何者だ？そして何処から入った。何故幽々子様の横にいた。」

そう言う、刺客は殺気を飛ばしつつ、海亀を睨む。

「ふん、お主に語る事など無い」

「・・・まあ、良い。斬れば分かる、先代のお祖父様の言葉です。」

「そうか、ならば殺ろうか。」

「ええ。今代、白玉楼の剣術指南役兼庭師、魂魄妖夢（こんぱくようむ）二つ名を名乗るならば、蒼天の庭師、お前は？」

「では妖夢よ、真庭の名乗りを教えてしんぜよう」

ワシは真庭忍軍十二頭領の一人で魚組指揮官で、真庭一に最高格好良くて、最高いかった、最高強い、最高もてもて、最高金持ちの真庭 海亀だ。通り名は、長寿の海亀だ。剣術を扱う者ならば教育してやろう」

「ほぎげ。白玉楼に侵入した事を後悔しろ」

海亀は細い鞘の中から刺突剣（レイピア）を取りだしてフェンシングのような構えをする。

妖夢は空いてる片手で脇差しを抜き、自流の構えを取る。

「では、尋常に。始め！」

そう上げた幽々子の声を合図にし、両者は激突した。

次回予告

「面白い能力だな。」

「そうかい？君も同じだろ。読み取るんだから」

「おい、魔理沙。少しは金払え」

「うるせえな。」

「まあ、オレは幸せな方な人生を送れてると思うぜ？人を殺さない生活を送れるのもな」